主題：高齢者在宅ケア従事者のストレスとコーピングの関係

－副題：介追跡調査の結果と考察－

○　秋田看護福祉大学　　氏名　駒ヶ嶺　裕子（会員番号8258）

キーワード3つ：介護ストレス、職場の人間関係、コーピング

１．研 究 目 的

本研究は、追跡調査の結果をもとに高齢者の在宅介護従事者のストレス内容を明らかにし、介護従事者のコーピングを検討するものである。介護現場におけるストレスから健康に影響を及ぼすことで、長期休業や過労死に至る場合がある。実際、高齢者ケア従事者のストレスによるバーンアウトは心身の不調を招き、介護従事者の離職へとつながる。職員の入れ替えは高齢者サービスの質の低下と介護事故などにつながる恐れがある。このことから高齢者の在宅サービスを実践している社会福祉法人の協力を得て、2 度の調査からケア従事者のストレスとコーピングの関係について考察する。

２．研究の視点および方法

【調査の対象】

平成25年7月現在、A県の高齢者在宅介護事業所に在籍されている全職員43人である。

【調査の方法】

無記名による自記式質問紙調査票を実施する。調査を実施する施設の責任者へ研究の主旨を説明し、責任者の承諾を得られた職員を対象に本研究の目的を文書と口頭で説明する。同意を得られた職員にアンケート（無記名）を記入してもらい、準備した回収箱に投函であった。

【調査期間】

調査実施時間は、8月23日（金）～8月30日（金）就業終了までであった。

【調査項目】

調査項目は、ストレス因子を明らかにするため、平成7～11年度厚生労働省を受け、既存の多くのストレスに関する質問票を検討し、現場で簡便に測定・評価することが可能で信頼性・妥当性の高い「職業性ストレス簡易調査票」を秋田大学の佐々木氏がアレンジした質問用紙を使用する。この調査の質問項目は全部で30項目であり、ストレス因子、ストレス反応およびストレス支援であった。

【分析方法】

高齢者ケアに従事する介護職員を対象に職業性ストレス簡易調査を基にして（1）仕事

の量的負担（2）仕事の難しさ（3）職場の人間関係（4）個人の心身の状態（5）社会的サポート（６）職業性ストレス得点（全体）の６項目とした。

３．倫理的配慮

施設長、担当者へセンター長様あての協力依頼文書（巻末添付）とともに直接訪問し、研究の趣旨、内容、方法、倫理的配慮、個人情報の保護を説明し、研究協力承諾書を得てから研究を実施する。承諾を得た後、職員が参加される会議等（朝の申し送り時）へ出席し、研究の趣旨、内容、方法、倫理的配慮、個人情報の保護を口頭で説明し、職員の権利の尊重と調査協力の任意性について保障し、調査協力の拒否・辞退による不利益は一切生じない旨をご理解いただく。また、得られたデータは全て統計的に処理し、個人が特定されないように調査票は無記名で行いIDによって管理すること。(IDナンバーを付けて、調査票名は名前ではなく、番号によって管理され、実際の分析にも番号でのみ管理されるので､匿名性は守られる旨を調査対象者に説明を行う｡)研究目的以外には使用しないこと、研究終了後は速やかに破棄すること、データの公表予定があることを説明する。また、協力の意向を確認した上で実施し､アンケート票の提出により研究に同意したものとみなす。研究の調査は、秋田看護福祉大学　倫理委員会の承認を得て実施された。

４．研 究 結 果

仕事の量的負担については､｢集中力が必要で､高度な技術を持続させながら多くの仕事をこなす｡｣と全体の50%以上の職員が負担を感じている。職場の人間関係は「部署内で意見のくい違いはあまりなく、馬が合う」が50%近かった。働きがいのある職場だと感じている職員は80%を超えている。ストレスがある職員は40%を超える項目もあるが、5年前の調査と比較すると今回の調査はストレスが低いと捉えることができる。5年前の調査は全体的に「仕事の量的負担」と「仕事の難しさ」が低得点でストレスが強いという結果であった。

性別は、「男性」16人（37.2%）であり、「女性」26人（60.5%）であった。年齢は、「20代」2人（5.7%）、「30代」7人（20.2%）、「40代」12人（34.5%）、「50代」10人（18.7%）、「60代」4人（11.5%）であった。雇用形態は、「正社員」14人（33.3%）、「正社員以外」28人（66.7%）、「その他」3人（2.4%）であった。職種別は、「ヘルパー」8人（22.2%）、「介護（デイ・訪問入浴他）」20人（55.6%）「相談（管理者を含む）」8人（22.2%）であった。

５．考 察

5年前と比較すると組織全体としての仕事量の見直し、勤務形態や職種による不公平感の是正、介護技術の高度化に対応した研修などのスキルアップのシステム導入や精神衛生管理者を配置したことなどが要因と考えられる。